

緊急生産調整推進対策の計画的な推進を図ろう。
直播栽培等新技术の導入と地域特性を活かした米づくりを進めよう！
あ、おいしい。

平成 1 1 年度

ロゴ貼り付け

稲作情報

中通り版
第 3 号
平成 1 1 年 6 月 2 9 日

「ふくしま新世紀農業・農村確立運動」県推進本部

発行：福島県米稲作情報編集会議
編集：福島県農業試験場

東北地方 1 方月予報（6 月 1 8 日仙台管区気象台発表）

向こう 1 ヶ月は、梅雨前線や低気圧の影響で、平年同様曇りや雨の日が多いでしょう。
平均気温は「高い」でしょう。

生育状況

- 1) 作況試験の生育：草丈はやや長く、茎数はやや多い。主穂出葉からみた生育の進捗は、平年より 2 ～ 3 日早い。
- 2) 現地の生育：草丈はやや長く、茎数は多い。生育は平年並から 5 日程度早く、葉色はやや淡い。

表 1 移植期別の水稻の生育状況(本場作柄解析試験)

品 種	年 次	5月 1日移植			5月 15日移植			葉色 (SPAD502)
		草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉齢 (葉)	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉齢 (葉)	
ひとめぼれ	本 年	44.4	689	9.7	37.0	691	8.7	42.0
	前 年	37.9	739	9.1	33.8	696	8.4	44.0
	平年比・差	103	105	+0.4	108	105	+0.3	-2.0
コシヒカリ	本 年	48.0	764	9.8	41.3	695	8.8	40.2
	前 年	39.0	680	9.0	35.5	704	8.5	41.6
	平年比・差	108	111	+0.4	112	103	+0.5	-1.4

表 2 高冷地における水稻の生育状況(冷害試験地)

品 種	年 次	5月 20日移植			葉色 (SPAD502)
		草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉齢 (葉)	
まいひめ	本 年	37.4	666	7.8	39.4
	前 年	31.3	486	7.4	38.7
	平年比・差	106	136	+0.2	-1.5
初星	本 年	34.1	719	8.5	41.5
	前 年	31.3	688	7.9	42.5
	平年比・差	106	127	+0.5	-1.8

移植栽培の技術ポイント

(6月23日調査)

(6月24日調査)

生育は順調 中干しと葉いもち防除を徹底しよう！

- 1) 直ちに中干しを開始して無効茎の抑制と根の健全化、地耐力の向上を図る。降雨のためにほ場の固化が不十分な場合は作溝を実施する。中干しは幼穂形成期前までに終了し、その後の水管理は間断灌漑に移行する。
- 2) 葉いもちは、6 月中旬以降感染に適した気象条件が出現していることから、7 月上旬から発生が多くなると予想される(表 3)。

本田に放置してある補植用置き苗は、早急に土中に埋没処分する。

散布剤による体系防除を計画しているほ場では、7 月上旬が防除適期と予想されていることから、ほ場をよく見回り、病斑が認められたら直ちに防除を実施する。

粒剤による葉いもち防除を実施したほ場でも、病斑が認められた場合は散布剤による防除を追加する。

- 3) 幼穂形成期は、平坦部、高冷地とも 1 ～ 2 日程度早まると予想される(表 4)。この時期に平均気温が 2 0 を下回ることが予想される場合には、前歴深水管理により障害不稔の発生を防止する。
- 4) 土壌中のアンモニア態窒素の残存量はやや少なめであるが、葉色は平年並である。穂肥は、生育診断に基づいて施用する(表 5)。窒素肥料の多用は、いもち病の多発や耐冷性の低下および玄米品質、食味の低下を招くので避ける。
- 5) 出穂前 3 5 ～ 4 0 日を目安に 1 0 a あたり 4 k g のカリ成分を追肥し、稈質の改善、登熟の向上をはかる。

表 3 葉いもち感染好適条件の出現状況(病害虫防除所)

地 点	日 / 6 月										
	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27
梁川	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
福島本	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
船橋	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
小野	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
白石	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
東白川	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

感染に好適, : 感染に適, : 感染可能

表 4 幼穂形成始期の予想(作柄解析試験)

場 所	品 種	本年 (月日)	平年 (月日)
冷害試験地	まいひめ	(7. 9)	7.10
	初星	(7.14)	7.15
本 場	初星	(7.11)	7.12
	ひとめぼれ	(7.12)	7.14
	コシヒカリ	(7.21)	7.23

注) 移植日 本場 5/15 冷害試験地 5/20

表 5 追肥施用の基準(平坦部)

品 種	つなぎ肥(-35日)		穂 肥	
	群落 葉色	N 施肥量 (kg/10a)	幼穂形成期 群落葉色	施用時期 (出穂前)
初 星	施用しない		4.0以下	25日
ひとめぼれ	施用しない		3.5～4.0	25日
コシヒカリ	3.0以下	1.0	3.0以下	25日
				15日
			3.0～3.5	15日

直播栽培の技術ポイント

必要茎数は概ね確保された。茎数制御・倒伏防止のための中干しと葉いもちの防除に努めよう！

A 湛水直播

1) 生育の状況

場内の生育：草丈はやや長く、茎数発生が概ね順調であり、生育は昨年より2日程度早い。幼穂形成始期はひとめぼれで7月21日頃の見込みである。

現地の生育：草丈はやや長く、茎数発生が概ね順調であり、有効茎数は概ね確保された。

2) 当面の技術対策

- (1) 目標生育量が確保されたら強めの中干しを実施し、無効茎の抑制と土壌の固化によって倒伏の防止を図る。特に、播種深度が浅い場合や苗立ち数が多い場合には、幼穂形成期直前までは場全面に亀裂が入る程度の強い中干しを行うとともに、その後もほ場の固化を進める水管理を継続する（表8、図1）。
- (2) 直播稲の生育量は、今後、出穂期にかけて著しく増大する。このため、窒素追肥は、幼穂形成期頃まで行わない。
- (3) 幼穂形成期前後の水管理やカリの追肥は、移植栽培に準じて実施する。
- (4) 移植稲に比べて葉齢の小さい直播稲は葉いもちに対する感受性が高いので、粒剤の予防散布を実施するとともにほ場を見回り、病斑の早期発見に努める。

B 乾田直播

1) 生育の状況

場内の生育：草丈はやや長く、茎数発生が概ね順調であり、有効茎数は確保できる見込みである。

現地の生育：昨年より出芽が遅れたが、その後の生育は順調であり、有効茎数は確保できる見込みである。

2) 当面の技術対策

- (1) 間断灌漑を継続し、中干しは実施しない。
- (2) 雑草の後発生が認められる場合は、中、後期剤で対応する。
- (3) 幼穂形成期前後の水管理や葉いもち防除、カリの追肥については、湛水直播栽培に準じて行う。

技術ポイントの基礎データ等

表6 湛水直播稲の生育状況（本場）

品種	年次	播種日 (月日)	調査日 (月日)	苗立数 (本/㎡)	茎数 (本/㎡)	葉数 (葉)	葉色 (SPAD)
ひとめぼれ	99年	5. 7	6.23	72	344	7.4	39.2
	98年	5. 8	6.24	97	537	7.0	45.4
	97年	5. 9	6.23	72	242	-	43.1
	96年	5.10	6.24	93	301	7.1	-
コシヒカリ	99年	5. 7	6.23	72	337	7.1	39.3
	98年	5. 8	6.24	128	732	6.7	43.4
	97年	5. 9	6.23	46	172	7.2	41.8
	96年	5.10	6.24	73	247	7.1	-

表7 乾田直播稲の生育状況（本場）

品種	年次	播種日 (月日)	調査日 (月日)	苗立数 (本/㎡)	茎数 (本/㎡)	葉数 (葉)	葉色 (SPAD)
ひとめぼれ	99年	4.23	6.23	130	374	7.0	35.5
	98年	4.22	6.24	131	383	-	-
	97年	4.23	6.23	210	438	-	-
	96年	4.25	6.14	78	99	-	-
コシヒカリ	99年	4.23	6.23	187	553	7.1	33.0
	98年	4.22	6.24	236	334	-	-
	97年	4.23	6.23	219	459	-	-
	96年	4.25	6.14	110	-	-	-

表8 湛水直播稲の落水管理方法とその影響

処理区 (かっこ内は 落水期間)	稈長 (cm)	押し倒 し抵抗 (kg・cm)	収量 (kg/a)	登熟 歩合 (%)	倒伏 程度 (0-4)
常時湛水	80.4	1.8	49.1	75.8	3.5
落水1回(中)	80.4	4.3	56.8	79.9	2.2
落水2回(中+穂)	78.4	7.1	62.7	82.6	1.0
落水2回(中+登)	78.1	5.5	64.8	85.4	0.5
落水3回(中+穂+登)	83.1	8.0	65.3	79.3	0.8

注) 品種：どまんなか。落水期間の「中」は中干し期、「穂」は穂ばらみ期、「登」は登熟初期。
(1998 東北農試)

麦・大豆栽培の技術ポイント

1) 麦類の調製 高品質麦を確保するため、調製は2.2mm以上の網目を使用する。

2) 大豆の管理

生育初・中期の湿害はその後の生育に大きく影響するため、明きょ等の排水対策を実施する。
除草・倒伏防止・生育促進のため、3～4葉期に初生葉の高さくらいまでの中耕培土を行う。
イネ科雑草が多い場合には、茎葉処理除草剤を施用する。

次号の発行は7月16日の予定

